

ドイツ文学をどう学ぶか

1 何を学ぶか

文学に学ぶ場合には、《何を》と《如何に》という問題は、切り離し難く結びついており、また各個が文学の学びかたを選択することは、偶然と資質と天賦とにもよります。それゆえ一定のコースを決めてかかることは不可能ですが、ここでは一般的な心構えについて若干触れ、参考に供したいと思います。

比較的新しい作家から入って行くことがよろしいだろう、ということは最初に述べました。ところで精読か多読かというような問題が常に繰返されるわけですが、できるだけ多くのものを精しく読んでゆくのがよいことはきまっております。ただ、その作家についてはほとんど全部読んだと言い得るような作家を、少くともひとり持つことは、極めて大切だと思います。そういう場合には、学びかたがいきいきとしたものになるばかりでなく、自分の資質がよく反省できますし、自分がドイツ文学に何を求めているのかと言うことが、いろいろと分って来るからです。そしてその作家をめぐる、他の作家やさまざまな問題が浮び上って来ることでしょう。一面、たとい翻訳でも広く読むことを忘れてはならないと思います。自分のなかの可能性を殺してしまったり、また見かたの狭さを免れるためです。欲を言えば切りがありませんが、多欲であって欲しいと思います。

ドイツではゲーテで博士論文をとることは、極めて困難だそうであります。ほとんどあらゆることがさまざまな角度からすでに言い尽された観があるからでしょう。しかし私たちは何も博士になるためにドイツ文学をやるのではありませんから、ひとりのゲーテはできるだけ読みたいと思います。それに対する態度はどうあろうと、ゲーテを読まぬドイツ文学者はほとんど考えられません。職業的なドイツ文学者にならなくても、ゲーテを知らなくてはドイツ文学について書かれたものが分らない、ということは最も頻繁に起り得ることです。資質に応じて、また年齢に応じて、ゲーテ観が変わることはありましようが、絶えず繰返して彼の文学に触れることは極めて意義があり、実り多いことでもあると思います。

ドイツにおいても、レンツ、グラッペ、ビュヒナーというような特異な作家が再認識されたり、十九世紀中葉の作家が古典的作家として評価されたり、また《疾風怒濤》時代が大きくクローズアップされたり、バロック時代のことが開明されたり、社会的な問題とのつながりにおいて《若きドイツ派》について反省されたりしたのは、比較的新しいことであります。私たちみずからが新しい照射を各個の作家や一時代に対して当てることは、大きな喜びともなりましよう。文学史などでも、一度とられた評価や批判はなかなか抜き難いものです。外国人であることは、或る種の顧慮や偏見を免れる利点があることもあります。謙抑に、しかしみずからの眼を信じなくてはなりません。ドイツの秀れた学者が日本の留学生に、しばしば、ドイツ文学史のうちいわば空白となっているのは、いわゆる《ゴチック》の時代であるから、この時代をやればハンデキャップなしに研究成果を挙げ得るだろう、と奨励されたそうであります。実際、中世末期からルネサンスにかけての一時代の文学は、多く無名の文学でまだ十分に明らかにされてはおりません。日本にあっては、マイクロフィルムでも普及してそれが輸入されなければ、この分野においてドイツ人と拮抗しようなどと考えることはとうてい無理でしょうが、この事実だけでも何らかの参考になると考えて、触れておいた次第です。

日本においては、一般に中世学はまだ発展しておりませんし、またたとえばドイツヒューマニズムとか、ドイツ神秘主義とかいったような運動や系譜は、まだ十分に明らかにされているとは申せません。そうした大きな問題と取り組む人々も出ることも大変に望ましいと思います。自分の必要や欲求に従って、奇妙な発展の道を辿ったドイツ小説

史とか、或いはもっと狭く限ってドイツ教養小説研究というようなテーマを見出すこともできましょう。またドイツ詩法の研究なども、ドイツの学者の詩学ばかりたよらずに、日本人として実際に多くの詩に触れて地道にやってみることは、日本のドイツ文学研究にどんなに大切なことか分りません。そういうものは日本人には無理だ、とばかりは申せません。たとえば鈴木信太郎氏の『フランス詩法』などは、如実にそのことを示しております。

私たちの外国文学研究は、競馬のように穴を狙うと言うようなものであってはならないのは、無論のことです。古くさい言い草のようですが、ひとつひとつを血肉と化さなければ無意義ではありますが、自分だけの感傷に溺れているだけでは何にもなりませんし、明治以来の先人の学燈を承けて、もうここいらですべての人々が遠大な気宇において研究を飛躍させねばならぬということは、誰でも感じている真摯な欲求だろうと思います。ドイツ文学の世界のほんの入口にある私たちに、或る意味ではそうしたすべては托されているのであります。

2 如何に学ぶか

私たちの対象とするのは文芸作品ですから、それを理解し享受するためには、みずからそのひとつひとつに入り込んで、細部の味わいまで漏すことなく掬[く]み取るように努めなければなりません。ドイツ文学の性格、またドイツの学者の傾向にもよることですが、私たちはとかく、イデーといった面に走り易いように思われます。勿論イデーというものを捉えることは最も大切なことですが、その前提となる細密な鑑賞能力を養うことを怠ってはなりません。なぜこんな分りきったことを言うかといえば、私たちが作品鑑賞の手がかりとするのは多くドイツ人の書いた文献であるからであります。彼らは勿論作品の細かな点まで自然な理解ができるわけですから、もっと根本的な諸問題に突き込んで行くのは当然であります。そこで私たちは案外、前提もしくは基礎となるものを通り越して、彼らと同じ場で考え、論ずるというような気持になり易いわけです。私たちは外国人であることをよく反省して、謙虚に、しかしまた何もドイツ人と同じに考えなければならぬ義務はないわけですから、みずから恃[たの]む気概をもって、学んでゆかなければなりません。つまり私たちは外国文学のひとつを学んでいるのだという自明な理屈をよく胆に銘じてかかる必要があるのではないのでしょうか。

そう考えると、たとえば次のような問題が起り得ます。私たちの直接的理解の対象となるいわゆる近代文学の詩人・作家・批評家はプロテスタント出身者が多く、また文学研究というものが盛んとなった時代は比較的新しいので、政治的にはプロシヤの勢力が伸長した時代と見るができます。してたとえば、プロシヤがオーストリーを圧した過程は、宗教的には新教の旧教に対する優勢と見做すこともできるのではないのでしょうか。そこでドイツにおけるドイツ文学研究には大勢としてプロテスタント的な見かたが濃厚に浸[し]み出ていることも、また当然の成りゆきであります。私たちの国のドイツ文学研究にも、宗教的基礎は別としても無意識のうちにこの傾向が何らかの形で伝わっているように思われてなりません。そこで研究が一種倫理的な傾きを強く持ったり、人生論的な行きかたをすることが多いように思われます。けっしてこの傾向がすべて悪いのだと言うものではありませんが、十分に注意しなければならない点ではないのでしょうか。分り易くするために音楽に例をとってみれば、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトといった巨峰がともかくもカトリックであったことは、存外に忘れられます。何もカトリックのものはカトリックに返せ、とは言いませんが、事実上眼を覆うことはやはり誤りだと考えます。

ドイツ文学研究を外国文学研究とはっきり意識するならば、幾多の欠点があり、また今日古びて見えようとも、あのゲオルグ・ブランデスの方法なども、改めて反省して見るのが大変有益と考えます。その鑑賞眼と言い、その広い視野と言い、けっして一笑に附し去るべき性質のものではありません。邦訳としてドイツ文学関係では『ドイツ浪漫派』（吹田順助氏訳）、『ゲーテ』（栗原佑氏訳）が以前に出しております。

こうなると語学についても、ドイツ語の力を不断に養う一面、英語、フランス語のようなドイツ文学と関係の深い文学を持つ国語を何とかものにしたいものです。(また人によってはラテン語を習得され、ドイツ文学の古い時代のラテン語文学について研究されたならば、どんなに私たちの研究は豊かになることでしょうか。)私自身外国語については非常な不便を感じておりますので大きなことは申せませんが、語学は実は全く忍耐と勤勉とによって或る程度の読書力を獲得できるものであります。こうした確実な手段によって、私たちのドイツ文学研究はどんなに限界を拡大されることでしょうか。それは単に新奇で気のきいた表現や方法をドイツ文学研究の領域に持ち込むというようなことではなく、外国文学としてのドイツ文学研究の態度そのものを学ぼうえに、示唆を受けることが少なくないでしょう。

特にフランスは、ドイツの隣国でもあり、また十八世紀後半以降ヨーロッパにおける文化的競争者となった関係があり、そのドイツ文学研究は眼ざましいものがあります。フランスにおけるドイツ文学研究は、大体、エルネスト・リシュタンベルジェ(1847-1913)ぐらいから確立されました。彼はゲーテの抒情詩、戯曲、ファウストに関するそれぞれの研究等、を遺しております。両国文化の接点シュトラースブルクやパリ大学において、ドイツ文学研究は進んだのでした。多くの研究者が輩出しましたが、そのうちシャルル・アンドレール(1866-1933)、アンリ・リシュタンベルジェ(1864-1941)の二人は最も大きな存在であり、多くの研究者を育成しました。前者には『ニーチェ傳』(六巻)の大著があり、後者にはニーチェ、ワーグナー、ハイネ、ノヴァーリス、ゲーテ等の研究があります。現在では、ジョセフ・フランソワ・アンジェロス(1893-)とジュヌヴィエヴ・ビアンキ(1886-)とが特に著名な研究家でありましょう。前者はリルケ、ゲーテの研究を行っておりますし、後者にはロマン派の女流詩人カロリーネ・ギュンデローデ、ニーチェ、現代オーストリー抒情詩の研究があり、また比較文学的業績としてフランスにおけるニーチェ及びファウストの素材移動史の研究があります。両者ともに手際のよいドイツ文学史を書き、またそれぞれいくつかの翻訳をしています。そのほか比較文学者として名著『フランスにおけるゲーテ』のフェルナン・バルダンスペルジェ(1871-)、『イギリスにおけるゲーテ』のジャン・マリ・カレ、国際文学史のポール・ヴァン・ティーゲム(1871-1948)(その『近代ヨーロッパ・アメリカ文学史』は小林正氏によってすでに上巻が翻訳されております)等があります。フランスにおける研究が、たとえばハイネを例にとると、ルグラの詩人ハイネ(1897)に続いて、リシュタンベルジェの思想家ハイネが出(1915)、更に近くヴェルメイユによってハイネと政治との関係(1939)が考察されるというようなふうにして、研究を積み重ねていっているのは、いかにも羨しい限りです。ただ注意すべきことは、フランスにおけるドイツ学一般が、ドイツの政治的勢力の伸張の根源を探ろうとするような意図に発していることが多く、いわゆるパンゲルマニズムを警戒しすぎる傾向が強い場合がしばしばあることです。前に挙げたレイノーの有名な研究にも、そういう面が強くあります。第一次大戦前後からは作家や批評家もドイツ文学に触れることが多く、ジイドなどはドイツ文学と極めて深い関係を持っているように思われますし、そのほか『ドイツ論』を書いたジャック・リヴィエール、浩瀚な日記やエッセイ集を遺してそのなかでドイツ詩人にしばしば触れているシャルル・デュ・ボス(彼の死後『ゲーテ』に関するエッセイが一巻に纏められました)、前にも触れたエドモン・ジャルー、リルケやカフカやヘルダーリンについてのエッセイを書いたダニエル・ロプス等々、挙げ出したならばきりがありません。たとえばリルケ研究のためには夥しいフランス人の文献を探ねることが必要であります。こんな具合でフランスの研究や評論によって教えられるところは極めて多いと思います。フランスの学風は一般に実証主義的であると言われておりますが、ただそのみのとどまらずイデーを捉える能力においても、大いに鋭いものがあります。最近しばしば見られるロマン主義や神秘主義を知的な分析において見ようとする傾向なども大いに参考になりましょう。

さて、こうした有力な範例に倣いながらも、私たちはみずからの手で長い研究の道を探る一面を怠ってはならないでしょう。たとえば、ひとりの作家に或る思想家とか外国の或る作家とかの影響がある、というようなことは、勿論多くの秀れた内外の学者の研

究の成果によって私たちにも教示され、示唆されるわけですが、そういうものを必要に応じて時にはみずから辿って確かめる努力を払うことによって、何か自分にとっての問題を見つけ出したり、新しい道を拓いたりすることも多いものです。フランス文学史においてはデカルトとか、パスカルとか、百科事典派の人々とかを欠いたならば、それは不完全なものでしょう。勿論これらの哲学者・思想家の書いたものの性格にもよることですが、それに比べてドイツ文学研究においては巨大な理念の建築を楽しむ風があるように見えて、実は例の詩作[デイヒトゥング]とか文学作品[シェーネ・リテラトゥール]とか言う考えかたに煩わされ、思想一般の動きや実体を別扱いにして割合上滑りする場合が少なくありません。これはどうしても警戒しなければなりません。そういうことは、みずから当ってみようとする態度によって次第に克服されることでしょう。これは哲学だけに限らず、補助学(ドイツ文学を中心として言っているのもであって、何もそれぞれの学問的領域の序列の上下を意味しているわけではありません)としての美学・心理学・芸術史・政治史・社会学・経済学、等々との研究上の関係づけは、けっして意味の小さなものではありません。私たちの力には限度がありますが、一般に広くて深い視野に向けて努力を傾ける心構えはどうしても欠いてはならぬものであります。たとえば農民戦争をテーマにした作品はいろいろありますが、それらを見てゆく場合、エンゲルスの『ドイツ農民戦争』などを読むことはどんなに参考ともなり、必要でもあることでしょう。別に各国の文学についても努めて広く眼を開かなければならぬことは、今更言うまでもないことでしょう。

更にドイツの雑誌に絶えず注意を払うことは、ドイツ文学の現況をいきいきと捉えるために大変必要な手段であるばかりでなく、それによって過去の古典的作家についてもその研究の現在の段階を知るうえに極めて大切なことであります。(たとえばフランスの比較文学者バルダンスペルジェの『フランスにおけるゲーテ』の仕事は、「オイフォリオン」と言うような研究誌に注目して、ドイツにおけるゲーテ観の推移を洞察することによって、大きな効果を挙げ得たのであります。)ここで簡単に戦後ドイツの雑誌を一瞥して置きましょう。西独の文芸誌として「ディ・ノイエ・ルントシャウ」と「メルクル」とが特に有名であります。両者とも仏英米の作家・思想家にも絶えず関心を示し、またクロニックにおいて社会一般の問題と世界の動きとにもアクチュアルなつながりを持とうと努めている一種の文芸総合誌であり、我国の多くの研究家も少からずこれらに負うています。また同じく長い伝統を持つ「オイフォリオン」、「文芸学と思想史のためのドイツ季刊[フィアテルヤールシュリフト]」というような学術的研究誌が復刊されておりますが、これらは過去の大きな作家についての研究を中心に、学問的研究には大いに有益です。そのほか出版の現況を見るのに便利な「文学ドイツ」というような文学新聞もありますし、カトリック系の雑誌「高地[ホッホラント]」や「時代の声[シュチンメ・デア・ツアイト]」も有名です。東独の雑誌は現在入荷しにくいわけですが、最近「意味と形式[ジン・ウント・フォルム]」というのが入りました。「ドイツ芸術アカデミー」の機関誌で、東独の文学の動静を知るには必須の雑誌であります。また仏英米の雑誌・新聞一般に注意を払っていると、思わぬときに多くを教えられることがあります。私が戦後文学の箇所ではその例を二、三挙げたのは、窮余の一策というばかりでなく、そうした方面に注意することを奨めたいという気持ちからも触れてみた次第であります。それは外国人である私たちには特に、何らかの見かたを教えることが多いと思います。専門誌の一例を挙げると、フランスの「ドイツ研究」は秀れたドイツ文学研究誌であります。

最後に我国のドイツ文学関係の学会の状況について一言しておきます。およそ文学研究についても共同研究という方法は、大きな意義を持っております。最大限に発揮された個人の力にも限度がありましょうし、およそ他の人々の意見に傾聴することは、自分のそれを反省したり、或いは深めたりするうえに必要なことからあります。別な領域においてですが、京大の桑原武夫氏を中心に、最近「ルソー研究」の合同作業が行われた好例もあります。ところで現在我国には、全国統一学会として、「日本独文学会」があります。従前にはドイツ文学科を持つ各大学等においてそれぞれ小規模な学会を持っておりましたが、戦後における学会の一般的気運に乗じて、昭和 22 年春から、始めてこの学会が

生れました。学会代表者は創設来、東大の相良守峯博士が重任し、目下のところ会員数約 500 名で、毎年春季に総会を開き、併せて十数名の会員がそれぞれ研究発表の講演を行っております。便宜上、本部事務所は現在東大ドイツ文学研究室内に置いておりますが、既に福岡、広島、京都、名古屋に支部もでき、昭和 26 年度から秋季にも研究発表会を催すこととし、その第一回は京大で行われました。その他毎年二回機関誌の「ドイツ文学」を発行し、それには論文、研究レポートが充実して掲載されております。我国の事情からいって、この学会はドイツ文学の研究だけではなく、その普及をも目的とすることが適当と考えられましたので、広く一般愛好者からも会員を募り、相当数のアマトゥールの人々も参加されております。こうした学会に加わられることも、あながち無益ではないと考えます。そのほか、もと京大にあってゲーテ年鑑を刊行するなど、その存在を知られていた日本ゲーテ協会が慶大の成瀬無極博士を会長に戦後復活しましたが、資料の整備等まだ従前の状態に復帰できていないのは残念です。

3 学問的研究の諸方法

これまで主として、ドイツ文学を学ぶことは外国文学を学ぶことである、という一見自明な、しかしとかく忘れられ易いことにアクセントを置いて若干の点を見てまいりましたが、もとよりドイツ人によるドイツ文学の研究が最も重要なことは論を俟ちません。ドイツ人にとっての国文学研究の方法は、そのまま私たちができるものではありませんが、私たちにしてもその成果は最も多くのものを与えてくれるでしょう。その意味において、ドイツにおける国文学研究の概要を見ておきたいと思います。この方面の参考書としてはマールホルツ『文学史と文芸学』（角田俊氏訳・天人社）があります。これは 1922 年版で少し古いものですが、大体のことを知るのに大変便利な文献であると思われます。

ところでドイツでは、いわゆる《文芸学》ということがふつうに言われますが、その実質は大体ヘルダーあたりから始まり、この用語は《若きドイツ派》のムントが初めて使ったと言われておりますが、その大体の意味は、学問としての文学研究ということであり、広義においては文学史をも含めることもあります。狭義というか、現在のふつうの使いかたでは、文学の歴史に対する理論的文学論というようなものであって、人生とか美とか自然とか神とかいうような根本的問題から出発した巨大な体系を打ち樹てようとする人が多いようです。これはかなりな程度にドイツ的なものと言うことができます。そしてそれは、勿論大きな長所を持つ半面において、例のイデーに走り易いといわれるドイツ人の短所を帯びることがあります。この点には注意しなければなりません。文芸学についての研究書には高橋義孝氏『文芸学批判』（国土社）があります。

以下においては文学史と文芸学と、更には一般的研究方法とを交錯させながら、ドイツにおいて行われた文学研究の諸方法の概要を見たいと思います。

「文献的研究」とでも名づけるべき方法は、あらゆる研究の実証的基礎となるべきものであって、けっして軽視すべきものではありません。この分野の研究は、資料の乏しい外国では極めて困難であり、また二十世紀に入って文芸学の隆盛によってドイツにおいても軽視される風があります。その第一人者はウィルヘルム・シェーラー(1841-88)であり、彼の学風を直接間接に継いだ一派は、《シェーラー学派》と呼ばれております。前にもちょっと触れたシェーラーの文学史は、ドイツ文学研究の画期的業績であり、かならずしも文献学的研究とばかりは言い得ない広い視野を持った立派な仕事と言えましょう。いわゆる《シェーラー学派》は、文献渉獵の些末に走り、専ら考証に耽り、たとえばゲーテ研究のために洗濯物の書付を復刻したというようなことが有名な笑い話にされたくらいですが、そのように徹底した文献学的研究が、後のさまざまな研究の基礎となった点は、見逃せません。この学派は古典的作家の厳格な原本批判に基いて権威ある全集を編纂したり、またエーリヒ・シュミットの『レッシング伝』(1884)、フランツ・ムンカーの『クロップシュトック』(1888)、また特に一般向家庭書としても極めて普及したビルショウスキーの『ゲーテ』(1896)のような伝記の分野に、大きな業績を遺しております。

シェーラー派の実証主義的研究法は十九世紀末まで圧倒的に優勢を占めましたが、およそ二十世紀初頭からさまざまな新しい道が開拓されました。またシェーラー派はゲーテ止まりの古典作家研究を中心としましたが、ロマン派以後の十九世紀文学が新しい脚光を浴び、それらの作家に関する研究も輩出しました。

文芸学においてウィルヘルム・ディルタイ(1833-1911)の名を逸することができません。彼は生哲学、或いは構造心理学による文学研究を唱え、人格の根本体験から詩人の作品を導き出そうとしました。「体験と了解」とによって詩人の内的生活に感情移入しようとする彼の方法は、レッシング、ゲーテ、ノヴァーリス、ヘルダーリーンを論じた『体験と詩』(1912)によって雄弁に示されております。彼はヘーゲル以来の思想的巨人のひとりで、文芸学においても幾多の潮流を触発させました。

第一に「精神史研究」の方向があります。それにもさまざまな行きかたがありますが、ひとしく外的生活の伝記ではなく、詩人の内的発展と精神史的位置づけとを志している観念論的な方法であります。ルードルフ・ウンガー(1876-1942)は文学史を問題史と考え、『ハーマンと啓蒙主義』(1911)を書きましたが、彼は個人と時代との背後にあるデモニッシュなものを本質的な力として考察に加えております。フリードリヒ・グンドルフ(1880-1931)(本名グンデルフィンガー)は、『シェークスピアとドイツ精神』(1911)、『ゲーテ』(16)『ゲオルゲ』(20)、『クライスト』(23)と、極めて異色ある述作を遺しました。彼は一切の素材を科学の前庭に追放し、文学研究を象徴的叙述と考え、英雄と詩人という歴史上の人物を象徴的存在と見做しました。彼の新しい伝記は、詩人の外的生活に少しも触れるところなく、歴史を徹底的に主観化しております。また言語分析の鋭さを持ち、みずからも秀れた名文家である彼の諸作品は、魅力に富んだものでありますが、作品を驚くほど反復して読んでいるような彼の態度は忘れると、このような方法を真似ることは全く空疎なものに終る危険もなしとしません。たエルンスト・ベルトラム(1883-)も同様な態度をもって『ニーチェ』(1918)を書きましたが、これには「神話へのひとつの試み」という副題が付けられているとおりに、個性を伝説化してただ遺された作品によって各時代、研究者の各個がそれを解釈するという立場に立っております。この種の伝記にはまたフランツ・フェディナント・バウムガルテンの『C・F・マイヤー』(1917)がありますが、これは作品のみを通じてマイヤーという芸術家の生命と創造との根本形式をルネサンス的なものとして捉えようとしたものであります。これら新しい伝記学者たちがいずれも詩人ゲオルゲのサークルに近い人々であったことは、興味もあり注意すべき点でもありましょう。

グンドルフがいわば一種の心理学的解釈に傾いたとすれば、ヘルマン・アウグスト・コルフ(1882-)の仕事はより多く精神史的把握に力点を置いております。彼は精神史の観点からロマン主義を古典主義の対立概念とは見ず、ひとしく人文主義の発展と考えて『人文主義とロマン主義』(1924)を書き、また『疾風怒濤』《古典主義》《ロマン主義》を一貫させて大作『ゲーテ時代の精神』(1923-)を書いております。

そのほかヘルベルト・チーザルツ(1896-)は『精神科学としての文学史』(1926)を書き、文学史を歴史学から分離しエミール・エルマチンガー(1873-)は主観的理念史を志し、立場のちがいはありますがそれぞれ文芸学の方法論的基礎づけを企てました。

次に「様式美学的研究」とでも名づけるべき方向が、文芸学のひとつの大きな潮流であります。文芸学の分野ではディルタイがすでにその動機を与えましたが、『ルネサンスとバロック』、『美術史の根本概念』の著者である、美術史家ハインリヒ・ヴェルフリンがこの模範を示しました。芸術学の研究法に学んで、オスカー・ワルツェル(1864-1944)は文学作品の形態と精神的 content との関係をも美学的に考察しました。彼は1909年に総合的文学史を企て、文学史の様式史的な時代区分を始めて行い、『文芸作品における内容と形態』(1923)において、内容美学と形式美学との総合に努めております。彼はシェーラー学派から出発しましたが、その学派から言語研究に対する熱意を継承するとともに、生涯を通じて主としてロマン派の研究に従事して新しい研究領域を拡張しました。その『ドイツ・ロマン主義』(1908)はロマン派を総括的に扱い、各詩人を連関

的に捉えた記念すべき研究であります。フリッツ・シュトリヒ(1882-)もまたヴェルフリンから学び、様式においてのみ人は永遠の人間実体、すなわち本質を掴むことができると主張しました。その『ドイツ古典主義とロマン主義』(1922)において古典主義を完成、ロマン主義を無限、と定義したことは余りにも有名です。近くは『ゲーテと世界文学の理念』(45)があります。彼の評論集『文学と文明』(28)は多くの人々に読まれたものですが、極めて明晰な対立概念を巧妙に操作するのが彼の特徴です。これらの文芸学者の影響力は大きく、いわゆるワルツェル派とシュトリヒ派とは、それぞれ現代の文芸学に重要な地位を占めております。

文芸学の領域では、そのほかブルダッハ、ペーターゼン、やや下ってはローベルト・ベッチのような人々の名を逸することはできないと思いますが、ここでは一々の説明を省略します。理念構成や類型学に秀れている文芸学の学風は、勿論、極めて特徴に富むものですが、そのもとになる作品の実態をよく知らないでいきなり飛びつく空疎な議論に陥る危険があることを殊に外国の研究者である私たちは十分に注意しなければなりません。

文学研究法としてほかに挙げるべきものは、前にも挙げたナードラーを頂点とする「民俗学的、人種学的研究」、フロイト、ユング、アードラー等の「精神分析学的研究」等があります。前者はたとえば《ユダヤ人殺し》と仇名された、文学史家バルテルスのような極端に排他的な傾向を含んで、ナチスに利用された点もありました。しかしナードラーの仕事には傾聴すべき点も少なくありません。たとえばスイスに傑出した芸術が生れない理由について、スイスがローマ的文化の形態を持ち、官僚制度や形式主義を重んじる風がある、と指摘しているなどは、面白い見かたであります。後者はドイツ文学に関する実際の研究業績はまだ少いようですが、神話や童話の研究に与えた影響も多く、また表現派の人々、トーマス・マンやシュテファン・ツヴァイク等、現代作家に直接間接に影響しておりますから、特に研究法としても軽視できぬものであると思われます。我国においても高橋義孝氏がこの分野に注目を払っておられることが、その業績から窺われます。

最後に「社会学的・経済学的研究」の分野が、重要なものとして挙げられなければなりません。多かれ少かれ個人主義的なものの見かたに止まっていた文学研究は、二十世紀に入って芸術形式と現実的生活、政治経済の形態との連関において社会集团的な見かたを獲得するようになりました。その意味でこの分野は大きな意義を持っております。

新古典主義の時代のアウル・エルンスト、ウィルヘルム・フォン・ショルツ、そして殊に比較的早く死んだザムエル・ルブリンスキー(1868-1910)は、この方面に業績を遺しました。ルブリンスキーの『十九世紀における文学と社会』(1900)はもっとも知られております。彼は公衆の意識の変化、社会の変革と推移、と文芸との関係を考察しました。

唯物史観に基く文芸の考察において、フランツ・メーリング(1846-1919)の功績は大であります。その劃期的研究『レッシング伝説』(1893)のほか、死後編纂された『文学史のために』(1922)のうちには、シラー論等ドイツ古典文学に関する論文が収められ、ひとつの典型を樹立しております。

以上述べたところで研究の方法論は尽きるものではありません。そしてここに挙げたそれぞれの流れに関連してでも、本来は多くの哲学者・美学者・心理学者・社会学者等の名を挙げるべきであります。それらに関しては諸君が今後研究を進めてゆく場合に、それぞれ相当深くぶつかってゆかねばならぬでしょう。なお専門的文学研究者でない各分野の秀れた学者に留意しないと、多くのものを見失いがちであります。たとえば今日実存主義の方向が注目され、批判も受けておりますが、ヘルダーリン研究を中心とした実存主義哲学者ハイデッガーの文学観、またリルケの『ドイツの悲歌』解釈を行っているロマーノ・ガルディニ(1885-)、ヘルダーリンの詩を註釈しているエーリヒ・ブシイワラ(1889-)、ドストエフスキーやニーチェの研究を遺したテオドル・シュタインビュヒェル(1888-1949)等カトリック実存主義の一派、これらも確かに研究上に示唆を与えるところ少なくないものであります。私たちはさまざまな研究法の長所を採り、短

所を捨て、すべて調和させるというようなことは、言うは易くして実はそう簡単にできるものではありません。現代の厳しい現実を前にして、少しドイツ的に大袈裟に聞えるかもしれませんが、自分の世界観的立場の選択に迫られております。こうした研究上の方法論の確立は極めて大切なことですが、私はそうした助言をする能力を持ちません。ただ、広い視野を養いながら、作品との周到な接触を次第に深めてゆく過程において、いつか自分の方法を発見せねばならなくなるのは、すべての人に起ることでしょうし、また起らねばならぬことでもありましょう。

4 研究上の若干の注意点

日本におけるヨーロッパ文学研究は、どの国の文学を対象にするにせよ、一般的には、共通の困難を持っております。それらの困難の或るものは克服することが絶望的でしょうが、或るものは一種の盲点であって、私たちにも道は拓けているのです。何も特別変わったことではなく常識的なことがらですが、ここにその二、三を挙げて見ましょう。

第一に、社会科学的考察のうえにおける弱点であります。1945 年以前の国情は、この分野の研究を抑圧しました。そしてドイツ文学の一般的性格(こういう言いかたがすでに批判の対象となるわけですが)、またドイツ文芸学の主潮、それらの諸力の下でドイツ文学研究はかなりの偏向を帯びていたように思われます。およそ学問・芸術が超越的な面を持っていると同時に、歴史的な面を有していることは、今日何びとも否定し得ないところでしょう。この意味において、私は総懺悔式の考えかたではなく、この分野の研究が実り多いことを信じます。それは、ただ表面的に言っただけでも、私たちの研究をアクチュアルな問題とする感覚を刺戟してくれるでありましょう。この研究は、政治史の表面を撫でるといような程度でなく、政治経済の資料を扱うだけの能力を具えて始めて可能なことであります。もしそうでなければ、例の同じ理念癖に流れるだけにとどまることでしょう。従ってけっして容易な道ではありませんが、この新しい視点の獲得物は、我国のドイツ文学研究にも新しい展開を与えるにちがいありません。最近ハンガリー出身のゲオルグ・ルカーチの『ドイツ文学小史』(小場瀬・道家両氏共訳)が邦訳され、それはレッシング以後ナチスまでのドイツ文学をひとつの角度から批判しております。コミュニズムの側からもさまざまな批判が加えられているようですが、従来の文学史の取り扱った大きな存在をかならずしも機械的にではなく歴史的役割において鋭く照射している点(事実、徹頭徹尾マイナスの面で批判されているのはクライストぐらいでしょう)、多くの人々に反省や考察のきっかけを与えてくれるにちがいありませんこの著書は一度は読んで頂きたいと思います。彼にはそのほか『ゲーテとその時代』(1949)があります。これは個々の作品分析に入っていて示唆が多いと思います。また『トーマス・マン論』(1949)は小冊子ですが鋭利な弁証法を駆使して、ドイツ市民階級の自己克服者としてのマンの本質を鮮やかに描き出しております。

第二に、キリスト教の問題があります。すべて宗教の諸問題は、窮極のところ内的体験に関することであって、単なる知識のうえのものではありませんが、かなりの程度にこの面を理解していませんと、文学研究に多くの支障を生じます。プロテスタンティズムと汎神論との二つの流れは、近世以降のドイツ文学上の諸問題・諸作品に特に多き関係しておりますから、全然その方面の知識なしで研究することは事実上不可能でありましょう。一般に欧米の文化を理解するうえにキリスト教を考えないではおられないということは常識として言われているところですが、殊にルターの家ドイツでは、新旧両派やその他の諸要素が複雑に交錯しておりますから、或る程度の知識なしでは文学現象を十分に処理できないと思います。キリスト教徒もおられることでしょうが、我国の文化伝統とは最も異質なこの方面は、実は多くの研究者が或いは嫌い、或いは苦手とし、或いは無関心でいるところですから、特に触れておく必要を感じたわけです。

第三に、比較文学的研究の必要であります。我国では耳新しいこの学問がどのようなものであるかについては、幸い最近、小林正氏『比較文学入門』(東大出版会)、中島健蔵氏編『比較文学序説』(河出書房)が刊行され、それらによってこの学問の目的と方法と

を知ることができます。ただここで一言しておきたいことは、ふつうに想像されていた、もしくは想像されているような、任意の作家の勝手な比較というようなことではなく、全く実証的な方法によらなければならないものだということです。将来は、独仏、独英というような比較研究も可能となり、それによってドイツ文学研究上の或る種の偏向も是正されることでしょうが、私は現在として特に日本におけるドイツ文学の影響・摂取の面を強調したいと思います。私たちの外国文学研究は、自国の文学を何らかの意味で豊かにしようとする志向を持たなければ、空しい、浮き上がったものとなり易いでしょう。そして明治以降の我国の文学者の受けたドイツ文学の影響を明らかにする仕事は、未来に向っても多くの示唆を与えてくれるにちがいありません。ところで今次の戦争による文献の消失も少なくなく、今にして基盤をつくっておかなければ、永遠に失われるであろう所の物も、けっして少くないと思われます。明治におけるゲーテやハイネの輸入とその影響は、けっして少くないものがあると考えられます。たとえば島田謹二氏は、日本におけるハイネ」というテーマを抱懷しておられるようにお聞きしましたが、たとえば藤村の詩の或るものが、ハイネを読んでその影響下に書かれた、というようなことが具体的に明らかにされるならば、藤村研究そのものがどんなに深いところに達することができることでありましょう。日本におけるゲーテも、軽視はできません。そしてその基礎となる文献蒐集は、たとえばアマチュアの一篤志家が私財を投じて独力で企図している東京渋谷にある東京ゲーテ協会によって、進行しております。こうした貴重な文庫が研究者に解放される時が一日も早く来ることを望んで止みません。私はこれから、日本におけるドイツ文学研究の歴史を大観し、更にその具体的一例としてゲーテを中心とした明治時代におけるドイツ文学の輸入に触れるつもりでおりましたところ、すでに予定の紙数が尽きましたので、省略せねばなりません、この方面の調査もドイツ文学を知る人々の手に委ねられた一種の義務であると考えます。

これらだけでもひとりの人の一生涯には余ることですが、研究の一分野の進行は、同時にほかの分野を刺戟し、促進しないではおかぬでありましょう。私たちが広い視野を持ちながら自己の資質と可能性とをできるだけよく生かしてゆくとき、全体として日本のドイツ文学研究はより豊かとなり、それはまた日本の文学に何らかの貢献をしないではおかぬでありましょう。

あとがき

いわゆる入門書は、学識豊かな大家の手になるのが最もよろしいことは、論を俟ちませんが、それでもまた私のようなみずから入門の段階にあって模索している者が、これからドイツ文学を知ろう、読もうとする人々と一緒になって考えるところも、何らかの参考になりはしまいかと思って、この仕事を引き受けました。余り型通りのことや、殊に文学史の知識などを羅列するよりも、自分自身にとっての体験的な諸問題を際立たせたほうが、かえってほかの人々の問題や考えかたを刺戟するものであるから、そのようなゆきかたをしたほうがよろしいだろう、と奨めてくれる友人もありましたが、この一冊で一通りのことを知る手がかりとなれば、それはそれで意味もあり、便利であろうと考えて、このような体裁をとりました。

それでもまだ含み得なかった事項や例証などが極めて多いことは、残念に思います。本小冊子は元来、1951年初春「ドイツ文学を学ぶ人々のために」というような表題の下に執筆を依頼されたものであります。従ってそういう題名に多少拘泥した点がなくはありませんが、勿論入門以外の何ものでもなく、そのためかえって広い範囲の人々に読んで頂けることを期待いたします。そこで都合のため本文庫に採られることになったのは、本文庫の趣旨には反するかもしれませんが、筆者としては幸いに思います。

本冊子の大部分は51年末に書きましたので、資料もそれまでのものに限られております。その間にドイツの文学についての紹介は、雑誌「人間」に書いたものがあり、それは或る人によって一面的であるという批評を受けましたが、みずから読んだ資料を通して見て、それに限界のあるのは無論のことでしょうが、およそのところでは現在の自分

としても訂正の要がなかろうと依然考えますので、それによりました。文学史の部分については、拙訳のあるアンジェロスの「ク・セ・ジュ文庫」版、ビアンキの「アルマン・コラン叢書」版、アメリカのソール・リップツィン『ドイツ文学の歴史的展望』（1936）、そして東大のローベルト・シンチンガー先生のドイツ語教科書版『ドイツ文学史概要』を主として参照しました。これらの著に仰いだのは筆者として多少の考えがあつてのことです。ドイツ文学の特質の部分については、リルケの翻訳者モーリス・ベッツの『ドイツの相貌』（1940）から多くの示唆を受けたことを、明らかにしておきます。なおこの部分をもっと充実させ得なかったこと、またジャン・マリ・カレの『フランス作家たちとドイツの幻影』（1947）等の新刊をまだ利用できなかったことは、残念に思います。

そのほか本冊子を書き下す際には、勤務先の先輩である富士川英郎、氷上英廣、大賀小四郎の諸先生から、或いは放課後の静かな珈琲を前にして、或いは講義の合間のひとときに、さまざまな御教示を受けたことに負うところ少くありません。殊に大賀先生には、その長い滞独の得難い御体験から伺った点が多大であります。また本冊子では極めて皮相に取り扱われているだけでありますが、比較文学関係の事項については、斯学に対する熱意のうえから平素、門外の私たち後進をも誘掖[ゆうえき]して下さる島田謹二先生の御名前を挙げさせて頂かねばなりません。本冊子の成立に関して、それらの方々に尊敬と感謝とを表わす次第であります。

1952 年 1 月